

古史伝説における漢「苗」関係と 近代中国における国族構築のプロセス

李 沛容

(訳 飯田直美)



清末以来、凝集力をもつ現代的民族国家をいかに建設するかは、近代中国の「国人」(国民)にとって喫緊の課題であった。国人は、「国族化」「中華民族化」を提起し、課題の解決手段および実現目標とした。古史伝説は、国族構築の系譜を論証するために「国族史学」の歴史的著述に転換された^{〔1〕}。国族史学において古史伝説の漢「苗」関係と国族構築は、早くから議論されてきた重要課題の一つであるが、近年、多くの学者がこの論争の重要性に着目し、近代における中国民族の起源に関する学説と民族認識とを関連づけている^{〔2〕}。実は、国族構築の究明は常に民族間関係の解決と同時になされ、民族間関係への対処は古史伝説の漢

「苗」関係の理解から始まるといえる。ゆえに、近代における古史伝説の解読と論争を通して、漢族と「泛苗化」された西南少数民族との関係、西南少数民族の主体性の位置づけ、および国族構築実現のための構想と戦略について、さまざまな視点からの展開を概観することができる。

一 「黄帝と蚩尤の戦」——「苗種」の周縁化

「苗」とは、明代後期に中原史研究者が西南民族を総称して以来、最も広まった呼称である。苗の呼称は、もとは貴州などの非漢諸族のみを示したが、次第に西南地区から

南方全体の非漢諸族の総称へと変化した。近代に種族の知識や民族の概念が導入された後も、西南民族に関する「泛苗化」された伝統的呼称と分類の知識は、そのまま独立した「種族」あるいは「民族」とされた。近代の民族観念は、西洋から日本を経て中国に輸入され、国人による国内の族類区分は、日本人学者による中国の人種分類の知識に深く影響されている。桑原隲蔵『東洋史要』（原書名『中等東洋史』）は歴史的な「科学研究」として王国維に称賛され、出版の翌年にはすぐ中国語に翻訳出版された。梁啓超、劉師培、趙容らは、これを踏襲して国内の族類区分を行った。梁啓超『中国史叙論』（一九〇一年）は、中国の「歴史上の民族」を歴史的重要性に基づいて六つに大別し、「苗種」を首位に置いて、「苗種は、有史以前は重要な地位を占めていたが、漢族の発展とともに次第に北から南へと追われ、現在は湖南・貴州・雲南・広西に余命を保つにすぎない」とする。これは、『東洋史要』の「苗種は古代に支那の中心に居住していたが、次第に漢族によって駆逐された」の記述に似ている。

苗が人種分類の重要な一支系とされたことは、清末民初の多くの国人による歴史上あるいは実際の「民族」区分と共通する。苗種という区分には、明らかに西南地区の複雑な族類を簡潔かつ統一化する傾向がある。これは、新知識（民族観念と近代民族主義思潮）と旧知識（古代史書）

の融合の結果である。新知識で最も重要な内容は、二〇世紀初めに中国の学界で一時期盛んになったラクペリー(Tarrien de Lacouperie 1845-1894)の「中国文明西來說」を起源とする。ラクペリー説では、黄帝は西バビロンから黃河流域に辿り着いた後、先住の野蛮な土着部落「苗」を征服して南方辺疆の山岳地帯に追いやったとする。

「西來說」の伝播については、西洋や日本の学界では多くの疑問と批判が起きたが、苗を中国上古代の先住民とする見解は国内外の学界ではほぼ一致している。上古代の苗の歴史は、日本の学界を経由して「西來說」とともに中国の学界で紹介された。一九〇三年に「西來說」を国内に最初に紹介した蔣智由は、「古の民族を研究するなら、まず必ず苗族の由来を研究せよ」と述べ、日本の鳥居龍蔵らの人類学調査を参考に、上古の苗に近代的意味の族性を与え、苗を「三苗」の蚩尤と結びつけた。その後の数年間に、「黄帝と蚩尤の戦」は漢苗の代表的な歴史事件として一般的知識となり、さらに教科書や白話新聞などを通して公共的知識となった。

苗種に関する新たな知識は、主に「西來說」などの新知識に関わる刺激や推進から生み出された。皮肉なことに、ラクペリーの「西來說」は、実はイギリスの漢学者レッグ(James Legge 1815-1897)やエドキンス(Joseph Edkins 1823-1905)の研究成果を参考にしたものである。レッグの最大

の功績は、多くの中国の古代経典を英訳したことである。王韜の協力で一八六五年に翻訳出版した『書経』では、漢族はノアの子孫で、西方から黄河上流に移り、その地の土着部落「苗」を打倒して追い出したとする。レツグの「苗」に対する認識は、『書経』の「三苗を三危に竄す」の旧知識による。新、旧知識の選択には、熱烈な西洋学称賛の背後に存在する国人の自信喪失状態が反映されている。「苗」に関する新知識は、西洋人の「他者」のまなざしから生まれたものである。

しかし国人は、西洋人が人類学等の知識でおおった旧知識を信じ、同時に西洋から伝わった新知識を求めたが、そこには二重の深刻な内的要素が含まれる。一は、近代の国族構築における黄帝イメージの造形との密接な関係である。「黄帝と蚩尤の戦」の歴史事件に関する新解釈は、黄帝に「征服者」のイメージを付した。「苗」が征服された不平等な地位に置かれる一方で、漢族の民族国家建設における主体的地位や統治的役割が突出する。二は、民族競争の時代のなかで、漢族が危急存亡の時に直面していることを速やかに自覚し、苗の歴史的運命を教訓としてその末路の二の舞から免れたことである。「苗」の歴史的運命は、漢族の祖である黄帝の偉業を明らかにするだけでなく、近代の「生存競争、自然淘汰、適者生存」の進化論に関して最も説得力のある根拠を示した。一方で、苗の歴史と地位

は相対的に周縁化、弱体化され、梁啓超は「苗」を「アメリカの紅人（先住民）やオーストラリアの黒人（アボリジニ）」に喩えた。苗を「劣った敗者の種族」とみなすことと、「苗」と総称された西南民族は中国国内の現実的な民族関係において不利な立場におかれることが決定づけられた。

清末、排満思想が盛んになった一〇年間は、近代的民族国家の建設に関する論争が漢滿関係に集中し、国内の民族間関係と中華民族構築の問題にまで肥大化された。清朝統治の合法性を主張する政治的必要性のために君主制維持を唱える立憲派は、特に、中国古代史において非漢族が漢族に融合された成功例を探し出すことを重視した。梁啓超は、社会進化論と人種優劣論に基づいて、相次いで「民族融合」「大民族主義」や「中華民族」の概念を打ち出し、「漢、滿、蒙（モンゴル）、回、苗（ミャオ）、蔵（チベット）」の融合による一大民族の創出¹⁵を主張した。非漢諸族が漢族とともに統一された国民をなすことは、西洋の学界が唱える「合群」や進化の概念に合致するだけでなく、上古代の「三苗」の歴史や近世の西南諸族を手本とすることができた。立憲派は西洋近代の「科学」知識と古史伝説から自身の論に有利な根拠を探し出すことに長けていた。「黄帝が炎帝に勝利し、南に苗人を破る」は、「進化の原則では、小を合わせて大をなし、大を合わせて国家を成す」と「昔、

九黎三苗は統一国家ではなく、強敵と争うにあたって小を合せて大をなすことを知らずに小のまま分かれて戦ったために力が弱まり、遂に亡んだ」を示す事例であるとする。¹⁴立憲派の多くは、中国国内の「苗」と総称される西南民族の存在を認識していたが、それは上古代の「三苗」の故事によっている。

これに対して、排満を掲げる革命派は、民族判定の重要条件として血統を強調し、純粹な漢族で構成する単一民族国家の建設を掲げた。汪精衛は著名な『民族的国民』で、「黄帝時代に戦った苗は、君主を蚩尤といい最強であったが、黄帝はこれを破って滅ぼした。『苗』のうち善なる者は鄒屠の地に移し、不善なる者は処罰した。善なる『苗』を民とよび、自族を百姓とよんだ、夏殷周の三代を経て百姓と民の別はなくなり、我々に同化した」とする。汪精衛は梁啓超の「大民族主義」を「うわごと」であり、「他民族はすでに我々に同化して久しい」と酷評し、「苗」は三代以来すでに漢族に同化しているとしてその存在を認めず、十八省全てが漢族に与えられた土地であるとした。学術面から排満の政治理論の正統性を論証するために、革命支持の国粹派である章太炎や宋教仁、劉師培らは、これまで強く擁護してきた「西來說」を放棄した。¹⁵章太炎は、黄帝が蚩尤に勝利したことと三苗の由来を詳細に解釈して、古の三苗は今の「苗種」と同一ではなく、九州も漢族が苗

人から取ったのではなく、かつての地を回復したものであるとした。¹⁷従って多数の革命派は、汪精衛とは異なり、「苗」の歴史的重要性とその末裔が西南地区に残存する事実を認めていたのである。

立憲派と革命派は、表面上はそれぞれ満州擁護と排満を主張するが、両者は学問的根拠や民族問題の認識面では相似している。これが南北講話の過程で「五族共和」の共通認識となり、調和への基礎となった。辛亥革命勃発後まもなく、革命初期に過激に進んだ民族主義的傾向は矯正せざるをえなくなつた。¹⁸革命派の一部は早期の狭隘な種族革命の思想を反省し、国内の各民族を合わせた共和政治の可能性と必要性を探った。しかし、五族と六族の双方に入れられていた「苗」は、中華民国成立前夜、民族合流の思想が盛んとなり、「六族」が「五族」にかわつたわずか数か月の間に「五族」から外された。

「五族共和」思想の根源は、一九〇七年の楊度の「金鉄主義」¹⁹に遡る。楊度は五族共和の国策確立を促したキーマンである。楊度の民族融合の建国思想と梁啓超の六民族共和の建国の視点は、実は同じ流れにあるが、重要な違いの一つに苗の排除がある。楊度は当時の学界で盛んであつた「西來說」の「苗」の歴史を知らなかつたわけではない。「苗」を除外したのは、一つには当時の中国辺疆の政治情勢に対する見方によるもので、いま一つは文化標準に基づ

いて国内各民族を判定したことによる。楊度の「国民統一主義」の主張によれば、民族融合による建国実現への道のりは、文化的「同化」によって「中華民族」の一体化を達成することである。「今日の中華民族は、国内の蒙古族、回族、藏族は文化も言語もそれぞれ異なるが、その他の満族、漢族は同一民族である」、故に、「苗」はすでに民族の主体的地位を失い、文化面で特に取り上げる必要はないとした。^{②①}最終的に政府や社会世論は楊度の「五族共和」説を受け入れ「苗」は忘れられた。「苗」は人口に限りがあり、散居して影響力が弱く、すでに漢族に同化したように映った。政府レベルに「苗」を代表する政治団体や人物がいなかったために、「苗」の民族的政治的地位は瞬く間に苦しくなり、中国の歴史と当時の辺疆全体の構成において地位が弱体化する要因となった。^{②②}

二 学術研究と

漢「苗」古史伝説の解読との分岐

民国初期の政府の「五族共和」に対しては、さまざまな見解や認識が次々に提出された。多くは忘れられた「苗」に言及したもので、当時の国人が中国の民族構成に関して多元的な認識の傾向をもっていたことを示す。

呉貫因は、一九一三年に早くも「五族」に対する異論を

唱えた。彼の論は、主に各族の融合によって歴史の伝統が展開するというもので、かつての「民族融合」論の延長である。「苗」への関心は古史伝説の記述と「西來說」による。史書に、「三苗」は中国文明に功績があり、漢族の祖が「苗」を貴州や雲南の山谷に駆逐したとあることから、共和を宣言する際には「苗」も平等に権利を享受すべきであり、「故に、種族に言及するのであれば、六族共和、六族平等というべきで、五族とは呼べない」とする。呉貫因の論は、後に「五族」を誤りとする「六族共和」の合理性の論争に深く影響した。民族史家の王桐齡は、四千年余り前に起きた漢と苗の衝突は有史以前の歴史事件であると主張し、『新著東洋史』において呉氏の苗に関する付論を全文引用した。一九三〇年代の初めまで、周谷城は、呉氏の「苗」に関する付論は「最も公平な話」であると、今日の中華民族は、漢、満、蒙、回、藏、苗などの大小各族が融合したものである^{②③}と唱えた。「五族」説は、一般の知識人から学界のエリート至るまで次第に国人の觀念からその合理性を失いつつあった。「五族」説への疑問は、ほとんどが西南諸族の存在という事実を意識していたことによる。

一九二〇年代、近代考古学が画期的に進展したことで、「西來說」は国人の懐疑と批判をうけ、中国上古代の民族と歴史に関する認識の視野から次第に消えていった。しかし上古代の漢と苗の争いに関する歴史事件、あるいは「三苗」

が現在の「苗」あるいは西南民族の始まりとする観念は、史書に明確な記載があるために改変されることはなかった。「擬古」を称する顧頡剛が一九二五年に編纂校訂した中学校教科書でさえ、苗族について、上古の「苗」は近代の「苗」と同じであろうとする²⁵。民族の具体的な構成については常に論争が続き、二族説から十二族説まで諸説紛々として統一見解が形成されることはなかった。しかし上古の「三苗」に対する伝統的認識をもとに、「五族」に「苗」を加えるべきであるというのが大多数の意見であった。

当時の国人は、中国の民族構成に対してさまざまな認識をもっていたが、その共通性は歴史と現実を両端において横軸と、各民族の相互関係を縦軸にして構成されていた。金兆梓が言うように、「中華民族の構成は、中国の歴史において各民族が単独または交互に活動した結果」である²⁷。「苗」に対する早期の認識は、歴史的視点による「苗」が主要な地位を占めており、特に上古代の「三苗」と漢との衝突が中心であったために、現実の「苗」についての理解は浅く、なじみがなかった。

一九二〇年代後期、近代の民族学人類学学科の創設や研究の進展とともに、学界では西南民族に対して長期の科学的規範に基づくフィールドワークが進められた。「西南民族」の概念の提示や関連の調査研究の発展が、過去の単に文献による漠然とした西南民族の認識、いわゆる「苗」に

対する認識を変えた。概念における認識では、学界は中国西南地区の各族を一つのまとまり、すなわち「西南民族」とみなした。これは過去に西南民族を「苗」の末裔とした歴史の影響であるだけでなく、民族学の実地調査や言語学研究によっても実証された。学界は「苗」の古史伝説の歴史的解説に対して、人類学による実証、社会学による考察、考古学による推察、民俗学による検討、文字学による研究、言語学による比較を結合させた²⁸。李济は代表作『中国民族的形成』のなかで、アメリカの社会学者サムナー(William G. Sumner 1840-1910)の「われわれ (we-group)」と「かれら (other-group)」の理論を引用し、中国辺疆民族の歴史と関係について論証した。特に「われわれ」である漢族と南方の「あなた (you-group)」の間の相互作用に注目する。「史書の記載にある「われわれ」が南方で衝突したのは、多くが苗、獠(ヤオ)、獯(トン)、獠(リヤオ)であり、彼らは言語学上同一語族に属する「モン・クメール語派であるとする³⁰。言語系統分類の利用による科学的方法は、西南民族の各族が姻戚関係にあることを認識する重要な方法であった。

言語学の系統分類の視点によれば、民国の学者の西南民族の分類体系に関する知識は、国家主体の意識に貫かれ構成されており、国家主権の独立と民族統一の主題を重視するものである³¹。黄文山は、李济の手法にならってアメリカ

の社会学者サムナーの理論を引用して中国歴史上の民族関係を明らかにした。「われわれ」と「かれら」の融合は「五千年來の文化の發展進化の主流となり」、古代の苗蛮は部分的に「かれら」として漢化し、「その他の一部はやはり漢化の途中にある」。これにより、黄は「中国の本位文化の建設」と「民族国家の建設」を主張する。すなわち、国家意識の範疇内で、漢族を主体とする「われわれ」の本位文化は、「かれら」の文化を吸収して新しい文化を作り上げた。「かれら」は、「われわれ」つまり中華民族として自覚し、民族意識に変化が生まれ、中華民族が生まれた。³²西南民族の融合分化は、国家統一と中華民族一体の範囲内で起こる。江応樑はかつてこう指摘した。西南民族は、「中華民族の一部である。これは歴史上に記載された漢族とは異なるが、実は漢族と同一である」と。³³中華民族と西南民族、各省の個別の民族間には互いに内包された関係が形成されたとする。

西南民族の主体的地位は常に論争の焦点となった。顧頡剛は、以前から擬古の信念に基づいて、民族一元説を意図的に打破し、「古代史については、民族の融合分化にそって系統の異同状況を探るべきである」とした。³⁴その後、西北や内蒙古での辺疆調査によって民族の危機を見出し、『禹貢』の辺疆研究を深めたことで、辺疆民族問題に対する認識を大きく変えた。中華民族についてはもはや個々の民族を分析すべきではないと唱え、「中華民族一元説」の論争を引き起こした。傅斯年は、血統融合を強調し、本説のもう一人の重要な推進者となった。彼は、かつて顧頡剛に手紙を送って「中華民族一元説の大義を大いにのべて、夷と漢が同一來源であることを証明すれば漢族の歴史を証明できる」とした。この学術理論の転換を経て、古史伝説中の漢「苗」の歴史は改めて調べられ、別の解釈がなされた。

一九三九年五月、顧頡剛に対する費孝通の批判に対して、かつて苗、蛮を調査した馬毅は、顧頡剛の「中華民族一元説」の観点を支持する文章を著し、西南民族を「異民族」とする主張を批判し、近世考古学の発見によってすでに「西來說」は破綻し、皆すべて土着であるのに、なぜ漢族は苗族同朋の土地を侵略しなければならぬのか、漢苗間の偽りの歴史的遺恨は研究によって一掃されており、西南民族はすでに漢族に融合されていると指摘した。³⁵後に、

凌純声は「三苗」に対する史実の考証によって、漢「苗」の土着融合論および「苗」の主体的地位の喪失を強く支持した。彼は湘西苗族の实地調査と史料考証に基づき、章太炎、朱希祖の見解を敷衍して、現在の苗は古代の苗でも、蚩尤の「三苗」でもなく、黄河中流より南に移ってきた「鬻」の後裔であると断言した。³⁹ 上古代の漢「苗」の争いは、広く教科書に組み入れられて共通の認識となっていたが、一九四一年六月、顧頡剛は馬毅との連名で教育部边疆教育委員会第二回第一次全体会議に「上古の歴史において漢が苗を黄河流域から駆逐したという伝説を正し、国族団結の障害を取り除く案」と題した提案を提出し、再度、現在の苗族は古の「三苗」とは全く無関係であり、教育部はすぐさまこの根拠とされる「西來說」の記述を教科書から取り除くよう要求した。教育部はこの議案を批准し、各教育部門に今後は教科書の編纂を監督するよう通達した。⁴⁰ これは、その後蒋介石が一九四〇年代初めに、「中華民族」は中国唯一の「民族」であり、「多数の宗族が融合して成った」とする宗族論の主張に合致するものである。

しかしこの議案は、統一教科書の言論表現に対して実質的な効果はなかった。当時、知識分子は「中華民族」全体の「国族化」を前提とした古史伝説中の漢「苗」関係について一致した見解をもっていなかったからである。上古史学者の徐炳旭は、二年後に出版した『中国古史的伝説時

代』で次のように明確に述べた。「三苗」は今日の苗や傣ではないとする考えの背景には、「帝国主義」がこれを口実に边疆民族の危機を作り出すことを学界が恐れたために、史料の記述を任意に取捨選択すべきではないとしたことにある。口実を与えない最良の方法は史跡考証を明瞭にすることであり、「苗蛮は中国南部に居住し、複数の異なる氏族集団があった。うち最も有名な氏族が三苗あるいは苗の民である」とした。⁴¹

古史伝説中の漢「苗」の歴史は、中国の知識分子が「中華民族」や「国族」の概念、および西南民族の主体的地位を理解するためのパラドックス型の歴史材料を提供した。古史伝説中の漢「苗」融合の前列は、「中華民族」が「国族」の観念と同等であることを示しており、「同化」と血統の融合はまさに「国族化」を実現する主要な経路である。⁴² 古史伝説の記載に統一性がなく信用度が低いことは、「苗」の土着化と民族の主体性を否定する論者に口実を与えた。一方で、それに反対する者たちは古代の文献に「三苗」と漢族との紛争の歴史が明確に記載されていることを無視すべきではないとした。フィールドワークの調査結果と合わせると、漢「苗」が古来より現在に至るまで異なる民族に属していたことは明らかであり、「中華民族」は多民族で構成された民族集合体なのである。

三 「漢夷同源」——抗日日期における古史伝説の漢「苗」関係のもう一つの解釈

「中華民族一元論」の論争は、主に學術理論と政策面に集中しており、顧頡剛を代表とする民族史学者と費孝通を代表とする民族学者らの国族構築方式の理解に対する違いを表している。論争が深まるにつれて、一部の知識分子の古史伝説中の漢「苗」関係に関する解釈は、もはや同化と融合の論調にとどまらず、族源問題に転換して「漢夷同源」研究の流れが生まれた。辺政学や民族学の進展のもとで、調査や研究手段の多様化は「漢夷同源」研究の「西來說」の束縛からの脱却と、多元的な面からの論証を促した。南京国民政府の宣伝機関である『中央週刊』は四期にわたって「漢夷同源」を特集したコラムを掲載しており、この問題に関する政界の関心を示している。

抗日戦争期に「漢夷同源」の観点を最も早く提案したのは、当時貴州大学校長だった孫廷休である。孫は、族称の分析を通して、漢族という名称は政治習慣によって中華民族の代名詞とされたものであり、今の苗と夷もそれに含めるべきであるとした。これは、史書に、苗夷は「はじめから漢族と同源である」と記されたことによる。すなわち南方の蛮夷の祖である高辛氏は、五帝のうちの帝嚳であり、

帝嚳は黄帝の子孫でもある。西南民族に流伝する盤瓠伝説や貴州苗族の洪水伝説は、漢人の盤瓠故事や女媧伝説のテーマと相似する。盤瓠は後世に広まった盤古氏であり、「三苗」は五帝中の三人の帝王あるいは帝族の苗の後嗣と解釈すべきである。よって「苗夷は実は漢民族であり」、「夷と漢は一元であり、同源の民族」であるとする。

孫廷休の論は理論説明に偏って実際の証拠が乏しいことから、馮大麟は古代の典籍を用い、人類学や民族学、言語学の理論を傍証とし、実地取材によって風俗や習慣、言語の相似性の視点から蔵、羅羅（ロロ、イ族の旧称）、苗は漢族と同源関係にあると論じた。また、「西羌は三苗を出自とし、姜姓の末裔である」と「三苗を三危に竄す」の記載を根拠に、西羌は現在の蔵であり、三苗の子孫である。「苗」は「穀物の苗」と解すべきで、農業民族であり、漢族と同源であるとする。さらに「三苗」の分化について、「蔵族は漢族によって辺疆に流刑された者の末裔であるが、地理的に隔てられて相互の往来はなかった。言語や名称は変化し幾通りもの解釈が生まれたが、流刑された者は「苗」の名称を維持した。しかし華夏族の勢力が日ごとに増したため、西に向かって西南大山谷に至り、今日の苗、瑤、羅羅などの民族に分化した」とした。

当時、「漢夷同源」論を論証するにあたっては、まず誤りがみられる古史伝説の変化を解読し、次に、特に史料と

民族誌資料を併せて近似する文化要素を明らかにした。同源論は、融合論の要素を吸収したが、結局、血統の融合や同化から民族起源の一元論へと転換した。論争の始点は民族史の解釈にあったが、着眼は現在にあった。

新儒家を代表する熊十力は、「漢夷同源」論を支持する文章で史料解読を徹底した。彼は、まず学界で長らく唱えられた「泛苗」論を批判した。広東や広西、雲南、貴州、四川、湖南等に散居する「夷人」を「苗、黎（リー）、獠、獠、羅羅、仡佬（コーラオ）」などの数十種に細分し、「すべての夷は苗族に属し、古代苗民の子孫である」とは根拠がなく、憶測にすぎないとした。近世に「人種西來說」が伝えられてから、「奇を好む者が、苗民は中原の土着民であり、我が漢族は西の果てから来て苗を駆逐し、中原の地を占拠した。今日の南部中部の各省のすべての夷人は古代苗の末裔であり、古に中原を追われて西南の山谷に生き残った」とするが、周口店で北京原人の頭蓋骨が発見されたことで「西來說」は破綻した。中国人種が古代から土着していたことで、その地で成長した苗人は漢族と祖を同じくするとすべきであり、異族ではない。よって熊十力は、苗民は姜姓とすべきで、神農の子孫であるとすることは虚偽ではない。「西來說」が苗を別種族とし、漢が苗を駆逐したとの説を広めたのは、推測であり邪説である。「今の西南各省の夷人がみな漢族であることは疑いなく」、

夷人の中の「苗子」を根拠に、夷人は古代苗の末裔であり、つまり今の「苗」は古の「苗」ではないとする。同源同祖の漢夷が分化したのは、夷人が山深い地に隠れて荒れた閉鎖的な地に住んだために、時間の経過とともに「特異な種族に落ちぶれて人に軽視され、夷とされるようになった。また自身もその出自を忘れ、夷と自称するようになった」⁽⁴⁶⁾からだとする。

一九四四年、日本が背後で支持した「汎泰主義」が議論を巻き起こした。方国瑜や徐序経、凌純声を代表とする学者は、日本とタイが西南民族のルーツの分化を企んでいると国人に向けて何度も警告する一方で、族源問題から発して起源を明らかにし、西南民族とタイ族との関係を明確化しようとした。一部の学者は、西南民族の族源を探究することを外部の分裂言論に対応する武器とした。

孫誕先は、言語や文字、血統、体質、由来、名称、服飾、飲食、歌曲、暦日干支、宗教やその他（姓、祭祀、時候、契約、兵器、巫蠱）などの要素全般から漢夷の同源性を論証した。古史伝説では、孫氏は故意に歴史書のなかから西南各族の先祖を漢族とする考えに合わせた記述を選んでいる。例えば『滇黔土司婚礼記』には「滇の東、土司は、文物は龍氏を最高とし、その祖は周漢の諸姫に至る」とあり、西南各民族は漢と血統を同じくするが、文化を異にすると記す。最後に孫氏は総じて次のように述べる。

「夷漢は、実は同源異系、同木分枝である。黄帝の後裔で、漢族の支派に属し、家庭内の兄弟にあたる。分化して四千年余りを経たが、源流を探究すべきである。分化して四千年、分化が長くなるほど疎遠となり、環境の変化に伴って言語習俗が変わった。国人は表面や形式の違いから苗夷を異族とするが、十分な論証とはいえない。しかし源流を探索しなかつたために今日の夷漢に関する齟齬を作り出し、誤解を深めている」⁽⁴⁶⁾。

貴州研究に通じた岑家梧は、「中華民族」の不可分性を明らかにするために、苗・仲と中原文化の関係を深く研究するよう学界に呼びかけた。仲家家譜や歴史書の記載によれば、「仲家は、もとは中原の漢族であったが、後に罪を犯して辺疆に流され、土着民と通婚し、次第に土着化した」。これに苗・仲と中原漢文化の相似性を加えると、両者は「同じ母体で生まれ、手足あるいは兄弟のような関係」⁽⁴⁷⁾であるとする。

前述の学者の論点が「他者」という傍観者の視点による解釈であるのに対して、土着のエリートである石啓貴の認識はより説得力を持つ。石啓貴の論評は、一九三九年『中央週刊』掲載の孫誕先や馮大麟らの専門研究論文にも取り上げられた。雑誌主編は次のように解説する。「石啓貴は苗族同朋で、湘（湖南）省府の命を受けて湘苗の状況を研究して久しい。本論は苗漢の問題を明らかにしたもので、

民族意識と精神を発揚させる手助けとなる」。石啓貴は自らこう言う。「私は苗族の考察に何年も従事し、苗漢源流について長く研究してきた。国史や一般認識を根拠に幾つかの事例が引き出せる——「苗漢の由来」「苗語各地区の実証」「苗華名称の実証」「医薬干支の実証」「姓氏一致の実証」「宗教習俗の実証」で、これらは、「苗漢は実は同源で、同木分枝の關係にあり、みな黄帝の子孫で、漢族の支派に属する」ことを証明する。注目されるのは、石氏が「苗」「華」の名称解読の二つの事例を引いていることで、「苗」の字に内包された意味を次のように述べる。

「一般の伝説では、苗華の二字の意味は、苗は根で、華は花である。華人は古くは蛮貊に住み、華族と名を定めた。貴い一族で栄えるという意味をもち、先に根と苗があり後に花がさく。これは、前と後が同源であることを意味する。苗の字は田んぼの苗である。植物が発芽した時のように未発育である。この一族の部落は争って勢力を拡大しない、農業を糧とする民族である。神農氏を継いで農事を行い、百合を育てたことからこの名を得た。しかしどのようにおうと決して同じ根源をもつとはいえない」⁽⁴⁸⁾。

黄帝を共通の祖とし「苗は根、華は花」とする説明は、石啓貴の「苗」「華」の淵源關係の再認定である。同源論は、古史伝説の漢「苗」關係の解読ロジックに対して選択的な史料抜粹と学術的観点、主観的な解釈と判定をうちたてた。

實際、「中華民族一元論」との論争では、漢「苗」古史伝説に対する解釈は同じではなく、同源論者は必ずしも西南民族の主体的地位を否定するのではなく、漢「苗」同源の歴史上の親戚関係を強調する。これは學術研究が証明する民族の差異性と国族構築の凝集力強調との不和と矛盾をある程度埋めるものであり、近代の国族構築に関していえば、比較の有利な解説戦略であった。同源論は古史伝説に対する理解に誤謬が少なくないが、時局に合わせたことで重要な現実的意義を有した。

同源論は民族起源一元論に立脚しているが、実は「中華民族一元論」の觀念とは道は違えど到達点は同じといえ、最終的には漢族を中心とする「同化」の道に向かう。孫廷休の「漢夷同源一論が提案された後、学界での西南民族への関心や目的は、「苗夷人民」の「復姓改宗」実現でなければならなかった。そのため同源論は、清末民初以来の学界や政界による「苗」の周縁化状況を解決していない。「蛮夷の民、三苗の子孫」を自認する魯格夫爾は、次のように「漢夷同源論」に疑義を唱える。

「近来、苗夷漢同源論を唱える者がいるが、私は苗族の一人として、この問題には賛成でも反対でもない。しかし私の観察によれば、今日、苗夷は団結して共に国難に立ち向かうべきである。研究者たちは同源論を声高に唱える必要はなく、我々が避ける必要もない。苗夷自身はたとえ史

書の記載がないとしても、決して漢と同源であるとは認めない。同源か否かは、苗夷には関わりがない。ただ政府当局が実際的な平等権利を与えるよう希望するのみである」。

ここからわかるように、一部の「苗夷」エリートは、「われわれ」の視点から西南民族の主体的地位を認め、「実際の平等権利」を与えるよう訴えている。「苗夷が団結して共に国難に立ち向かう」ことは、中華民族の凝集力と求心力を増強させる重要な前提であり保障であるとされる。

四 結論

古史伝説の解説と詳解は、近代の国族構築の過程において必要な言説資源であり基礎理論である。それは民族の起源問題に関わるため、古史伝説にはさまざまな符号や内在的意味が付与され、国族構築のさまざまなアプローチの骨組みに利用が可能であった。また古史伝説自体の不確定性と曖昧性のために、国族構築に関してさらに多くの説明を可能とした。清末民初、「黄帝と蚩尤の戦」に代表される漢「苗」古史伝説の解説は、近代中国の国族構築の起点となった。「泛苗化」と称された西南民族は、漢族や滿族、蒙古族、回族、藏族と異なり、近代の国族構築の究明と実践が始まると周縁化という劣勢の境遇に置かれた。古史伝説で「苗」が敗れたことは、「生存競争、自然淘汰」の近

代社会進化論に合致した結果であり、当時の中国全体の辺疆民族の枠組の中で「苗」が厄介な立場にあったことと密接に関係している。

しかし、西南民族問題に対する理解と認識は、むしろ近代の国族構築方式の探求と実践に深く影響している。「五族共和」の国策が確立したことで滿族や蒙古族、回族、藏族は早くから民族の主体的地位が確立され、政治や法律の面でも承認された。族類が複雑な西南民族は「五族」の外に追いやられ、その主要な問題は主体性を認めるか否かとなった。政界や学界での古史伝説の漢「苗」関係に対するさまざまな解説によれば、認識の傾向は三つに分けられる。一は、「泛苗化」された西南民族の主体的地位を否認するもの。主に歴史上の各民族は漢族に融合されたとする。西南民族は歴史の進行過程で漢族とは血縁上で融合し、文化面でも同化しており、「一元一体」の「国族」に融合され、「一体化された国族」と称することができる。二は、西南民族の主体的地位を承認するもの。西南各民族は漢族と同等の等しい権利をもつとする。主に「三苗」の歴史と「古苗」は「現在の苗」に繋がることを証明しており、西南民族の民族学研究を補填する有力な証拠である。西南民族は、「国族」や「中華民族」の形成が包含する「多元一体」と関係している、つまり民族多元化和国族一体化は「多元化された国族」と呼ぶことができる。三は

「漢夷同源」論を代表とし、部分的に西南民族の主体的地位を認めるもの。このような主体的地位は暫定的で、漢族を中心とした「国族」の中に溶け込んでいくに従い消失するもので、「同源の国族」と呼ぶことができる。主に漢と「苗」の同源共祖関係と文化的類似性を指摘する。この三種のうち、前者二つは近代の国族構築において並行して発展し、主な発展過程を形成するものである。

「泛苗化」された西南民族は、近代において主体的地位の承認が曲折を経たが、それは国人の西南民族に対する認識の歴史と一致したものであり、彼らの認識が曖昧模糊と明瞭明確とが併存する矛盾した状態にあること、かつ外部要素の強い影響を受けていたことを表している。南京国民政府と延安中共政権は、政界と学界の動きを背景に、政治的理念と民族政策の違いに基づいて古史伝説の漢「苗」関係の解説に関して異なる解釈をし、最終的に異なる国族構築の道を選択したのである。

〔付記〕 本稿は国家社会科学基金重大招標項目「二〇世紀二〇一四〇年代人類学華西学派的学术体系研究」（批准番号：17ZDA162）の成果である。

注

〈一〉 沈松橋「我以我血薦軒轅——黄帝神話與晚清的国族建

構』『台湾社会研究季刊』一九九七年第二八期。

〈2〉吉開将人「民族起源学説在二〇世紀中国」『復旦学報』二〇一二年第五期。楊志強「『蚩尤平反』與『炎黃子孫』——兼論近代以来中国国民整合的兩条路線」『中国農業大学学報』二〇一〇年第四期。

〈3〉楊志強「從『苗』到『苗族』——論近代民族集團形成的『他者性』問題」『西南民族大学学報』二〇一〇年第六期。

〈4〉梁啓超「中国史序論」『飲冰室合集』第一卷、中華書局、一九八八年、五頁。

〈5〉桑原隲藏『東洋史要』樊炳清訳、巻首、東文書社、一九九九年。〔桑原隲藏（一八七一—一九三一）著』中等東洋史』の訳）

〈6〉Terrien de Lacouperie, *Western Origin of the Early Chinese Civilization from 2300 B. C. to 200 A. D.*, London: Asher, 1894.

〈7〉観雲「中国上古旧民族志史影」『新民叢報』一九〇三年第三二期。同「中国人种考（統第四十八号）」『新民叢報』一九〇四年第三卷第五期。

〈8〉James Legge, *The Chinese Classics, Vol. 3, part 1*, Hong Kong: the London Missionary Society's Printing Office, 1865, pp. 189-190.

〈9〉張曉川「晚清西方人種分類説伝入考辨」『史林』二〇〇九年第一期。

〈10〉沈松橋、前掲論文。

〈11〉「私は四億の同胞が、慎重に苗人の轍を踏まないよう努力することを願う。今日私が苗人を悲しむのは、いつの

日か後人が私のことで悲しむことになるから」。陶成章「中国民族権力消長史」（湯志鈞編『陶成章集』中華書局、一九八六年、三一—四頁）参照。

〈12〉筑西SCY生「中国原始民族之現状」『新民叢報』一九〇四年第三卷第二二期、九一頁。

〈13〉梁啓超「政治学大家伯倫知理之学説」『飲冰室文集』第一三卷、雲南教育出版社、二〇〇一年、七五—七六頁。

〈14〉胡炳熊「論中国種族」『東方雜誌』一九〇七年第四卷第八期、三七—二頁。

〈15〉王精衛「民族的国民」『民報』一九〇五年第一期、七頁。

〈16〉唐文權・羅福惠「章太炎思想研究」華中師範大学出版社、一九八六年、五八一—五九頁。孫江「拉克伯里」中国文明西來說」在東亞的伝布與文本之比較』『歴史研究』二〇一〇年第一期。實際、蔣智由ら一部の立憲派も同時期にこの説を放棄した。蔣智由は「説歴史上中国民族志觀察系論」で、「かつて私は『中国人種考』で西來の説を主張したが、近頃はこの説に疑いを持っており、諸説のうちの一説とするには至つていないと言つしかなく、中国の人種について以前とは異なる見解をもつ」と言い、進化論を伝統的な文明野蠻の区分と結合させる觀念に転向した。「戎狄はもともと中国に住む種族である」「漢族はその原初は戎狄と同種で、戎狄から進化したものである」と考えた。「説歴史上中国民族志觀察系論」（『新民叢報』一九〇六年第四卷第一期、一二頁）参照。

〈17〉章太炎「排滿平議」『民報』一九〇八年第二二期、

三、五頁。

〈18〉張永「從『十八星旗』到『五色旗』——辛亥革命時期從漢族國家到五族共和國家的建國見過模式轉變」『北京大學學報』二〇〇二年第二期。

〈19〉「金鉄主義」劉晴波主編『楊度集』湖南人民出版社、一九八六年、三七四頁。

〈20〉村田雄二郎「孫中山與辛亥革命時期的『五族共和』論」『広東社会科学』二〇〇四年第五期。

〈21〉アメリカの滕華睿は、清代の政治的版図において、西北辺疆と比べて、西南辺疆は「苗、彝その他の族群は、強力な清朝統治と競い合わなかったが、藏人や蒙古人は別の合法性、すなわち清朝の体系を脅かすか、その体系に組み入れられるかに期待した」とする。滕華睿『構建現代中国的藏教仏教』陳波訳（香港大学出版社、二〇一二年、三七頁）参照。そのため過去の学界は西南辺疆研究の重要性を無視する傾向にあったが、中国明清史研究では、その価値は学界の重視を引き起こした。鄒立波・李沛容「西南辺疆在明清史研究中的地位——美国現代學術視野中的中国西南辺疆史研究」『思想戦線』二〇一三年第六期）参照。

〈22〉呉貫因「五族同化論」『庸言』一九一三年第一卷第七期、第八期、九頁。

〈23〉王桐齡『新著東洋史』商務印書館、一九二二年、四八頁。王桐齡「歷史上中国六大民族之關係」『庸言』一九一四年第二卷第四期、一頁。

〈24〉周谷城『中国社会之結構』新生命書局、一九三〇年、

四頁。

〈25〉顧頡剛・王鐘麟編輯、胡適校訂『現代初中教科書本國史』上海商務印書館、一九二五年、一三頁。

〈26〉梁聚五「苗夷民族發展史（草稿）」『民族研究參考資料』第一集、貴州民族研究所編印、一九八二年、二〇一—二二頁。

〈27〉金兆梓『新中華本國史』上冊、上海中華書局、一九三二年、六頁。

〈28〉学界はいまだに新興の「西南民族」という概念を理論面から整理分析していない。多くの者が「西南民族」の概念について構想は立てているが、この呼称を使用せず、岑家梧の「西南種族」や伝統的な「西南苗夷」「西南辺疆の蕃夷民族」「西南特種民族」などを使っている。

〈29〉楊成志「雲南民族調査報告」『国立中山大学語言歴史学研究所周刊』一九三〇年第一集第一二九—一三〇期合刊。

〈30〉李濟『中国民族的形成』江蘇教育出版社、二〇〇五年、二八一頁。

〈31〉彭文斌「中西之間的西南視野——西南民族志分類図示」『西南民族大学学報』二〇〇七年第一期。

〈32〉黄文山「民族学與中国民族研究」『民族学研究集刊』一九三六年第一期、一二—一三頁。

〈33〉江応樑「西南民族研究計画」『国立中山大学日報』一九三七年一月七日。

〈34〉孫中山『孫中山全集』第九卷、中華書局、二〇一一年、二一七頁。

〈35〉顧頡剛『古史辨』第一冊、藍灯文化事業公司、一九九三年、九九頁。

〈36〉周文玖、張錦鵬「關於『中華民族是一個』學術論述的考察」『民族研究』二〇〇七年第三期。顧頡剛と彼が創刊した『禹貢』半月刊では一九三〇～四〇年代の中国边疆問題の注目点、研究の変遷や発展との脈絡で論じた。孫喆・王江「边疆、民族、国家——《禹貢》半月刊與二〇世紀三〇—四〇年代的中国边疆研究」（中国人民大学出版社、二〇一三年）参照。

〈37〉「傅斯年致顧頡剛」一九三九年二月一日、檔案番号II・一四七。王汎森・潘光哲・吳政上「傅斯年遺札」社会科学文献出版社、二〇一五年、七二—一頁。

〈38〉馬毅「堅強『中華民族是一箇』的信念」『益世報』一九三九年五月七日。

〈39〉凌純声・芮逸夫『湘西苗族調查報告』民族出版社、二〇〇三年、一一—一頁。

〈40〉顧頡剛・馬毅「建議訂正上古歷史漢族驅逐苗族居住黃河流域之伝説以掃除民族團結之障礙案」教育部边疆委員會編『边疆教育委員會會議報告』一九四一年、四一頁。

〈41〉徐炳旭『中国古史的伝説時代』中国文化服務社、一九四一年、四一頁。

〈42〉顧頡剛の「同化」に対する認識は後年学界が批判する「大漢族主義」ではなく、各「種族」が自文化を保ち、共同で近代化を実現しようとするものにあった。

〈43〉孫廷休「苗夷漢同源論」『中央周刊』一九三九年第一

卷第三三期。「再論夷漢同源」『西南边疆』一九三九年第六期。「西南民族問題與边疆教育」『訓練月刊』一九四〇年第一期。

〈44〉馮大麟「漢族與西南民族同源論」『中央周刊』一九三九年第二卷第一五期。

〈45〉熊十力「五族同源論」『黃埔季刊』一九三九年第一期。

〈46〉孫誕先「西南民族與漢族同源的証据」『說文月刊』一九四四年第三卷第一二期。

〈47〉岑家梧「貴州民族研究述略」一九四四年『岑家梧民族研究文集』民族出版社、一九九二年、一三三頁。「有仲家来源斥泰族主義的錯誤」『辺政公論』一九四四年第三卷第一期。

〈48〉石啓貴「漢苗同源論」『中央周刊』一九三九年第二卷第三四期。

〈49〉扎洛「中国人種西來說」與清末的漢藏同源論』『青海民族研究』二〇一三年第四期。

〈50〉孫廷休、前掲論文。

〈51〉魯格夫爾「來函兩封」『益世報』一九三九年五月一日、第四版。

〈52〉吉開、前掲論文。